

続「アラブの春」——民主化の行方を読む——

泉沢 久美子

民主化は容易ではない。いわゆる「アラブの春」と呼ばれる民衆運動から約一年半をへた現在、エジプトをはじめ政権交代を果たしたアラブ諸国でも、民主化が必ずしも進展しているわけではなく、権力闘争による不安定な政権運営が続いている。小稿では、二〇一三年五月号に引き続き、「アラブの春」と民主化の進展について論じた書籍を紹介する。

●エジプト革命とその後

欣喜に沸いたエジプト革命であったが、その後の新体制をめぐる迷走は国民を落胆させるものであった。鈴木恵美著『エジプト革命—軍とムスリム同胞団、そして若者たち』(中公新書 二〇一三)は、革命が発生した二〇一一年一月から二〇一三年六月の軍による「クーデター」までの二年半について、めまぐるしく変わる民主化プロセスとその挫折に至る経緯を丹念に事実を積みあげて考察する。特に、革命後の政治的混迷については、革命の立役者であった青年勢力、ムスリム同胞団勢力に依存したムルシー政権、エジプト近現代史のなかで重要な役割を果たしてきた軍部の三勢力の対立構造と権力闘争を鋭く分析する。

加藤博・岩崎えり奈著『現代アラブ社会—「アラブの春」とエジプト革命』(東洋経済新報社 二〇一三)は、まず、「アラブの春」発生の背景となるアラブ諸国の中長期的歴史の流れと、エジプト革命が起きた社会経済的背景を探り、アラブ社会の構造的特徴を指摘する。後半部分は、「意識調査に基づく民意分析」という日本のアラブ研究では初めての大規模な社会調査を基に実証分析を行ったもので、二〇〇八年と一〇年、革命直後の一一年と一二年にエジプトの農村部と都市部を対象に、政治、経済、社会、文化、対外関係に関する意識の変化を分析し、そこから読みとれるエジプト革命の性格とその行方を論じる。

さて、ムルシー大統領の政権基盤としてエジプト政治の表舞台に登場してきたムスリム同胞団だが、日本ではほとんど知られていない。この組織について論じた書籍として、横田貴之著『原理主義の潮流—ムスリム同胞団』(山川出版 二〇〇九)、同著『現代エジプトにおけるイスラームと大衆運動』(ナカニシヤ出版 二〇〇六)がある。前者は、一九二八年の同胞団創設から発展、弾圧、復活に至る歴史と思想、活動実

態、アラブ諸国への拡大について基本情報を提供する小冊子である。また、後者は、同胞団の歴史的な展開を説明した後、近年のエジプトの社会変動のなかに同胞団の社会運動を位置づけ、イスラームと政治・社会問題の関係を明らかにする。吉川卓郎著『イスラーム政治と国民国家—エジプト・ヨルダンにおけるムスリム同胞団の戦略』(ナカニシヤ出版 二〇〇七)は、比較政治学の立場からエジプトとヨルダンのムスリム同胞団の運動を事例に、国内政治運動としてのイスラーム主義運動を論じる。

●アラブ諸国の民主化の行方

日本の研究者らは「アラブの春」以前からこの地域の民主化に関心を持ち、着実に研究成果をまとめている。

まず、松本弘編著『中東・イスラーム諸国民主化ハンドブック』(明石書店 二〇一)は、中東・中央アジア、パキスタン、インドネシアの二四カ国を対象に、現在の政治体制・制度、民主化の経緯、選挙、政党の四項目について各国の基本情報を提供する基本文献で、国家間の比較や全体像を把握する際、有益である。

石黒大岳著『中東湾岸諸国の民主化と政党システム』(明石書店 二〇一三)は、権威主義体制下にある湾岸諸国のなかでも政治運動が活発なクウェートとバハレーンについて

選挙と議会政治を分析したもので、他のアラブ諸国とは異なる両国の疑似的な政党制、すなわち支配一族に對抗する集団としての野党が果たしてきた民主化の進展を検証する。

山尾大著『紛争と国家建設—戦後イラクの再建をめぐるポリティクス』(明石書店 二〇一三)は、アメリカの介入という外部アクターと国内の宗派主義対立である内部アクターの「アクター間の関係性」に視点をおき、戦後イラクの紛争と国家建設の実態を実証的かつ多角的に描く。特に民主化については、戦後の国家建設のごく初期に導入されたことに注目し、アメリカ主導の民主化に対して国内シリア派宗教界がどう対処し、その主導権を掌握したか、そしてその後の国家建設にどう影響を与えたかを明らかにする。

さて、酒井啓子編『中東政治学』(有斐閣 二〇一三)は、これまで特殊で例外的な地域として比較研究の対象から排除されがちだった中東について、「アラブ動乱」を機に、比較政治学の枠組みに包摂する新たな分析視覚を探ろうとした意欲作である。若手を含めた一五名の研究者が体制維持の統治メカニズム、民主化と伝統的社会紐帯、路上抗議運動、国際政治といった観点から論じる。

(いずみさわ くみこ)アジア経済研究所 図書館